第３章　考察

Ⅰ　青森県における「郷土を愛する心」と社会教育との関係性

弘前大学教育学部　准教授　松本　大

１　はじめに―本考察で明らかにすること―

本考察では、次の 3 点について分析を行う。図 1 は本考察の枠組みを示したものである。

①「郷土を愛する心」はいかなる経験や資質によって成り立っているのか。**「郷土を愛する心」が形成される基盤を明らかにする**。

②その**「「郷土を愛する心」の形成基盤」には、どのような経験が影響を与えているのか**。特に子どもの時の経験に着目する。

③以上から、「郷土を愛する心」を育むための政策について、**特に社会教育行政に何が求められるのか**を指摘する。

２　「郷土を愛する心」の形成基盤

今回の調査を設計するにあたっては、いくつかの先行調査が参考にされている。そのうちの 1 つが、国立青少年教育振興機構『子どもの頃の体験がはぐくむ力とその成果に関する調査研究』（2017 年）である。本考察で取り上げる「郷土を愛する心」をとりまく資質・能力や経験に関する項目は、ほぼそのまま国立青少年教育振興機構の調査を踏襲している。

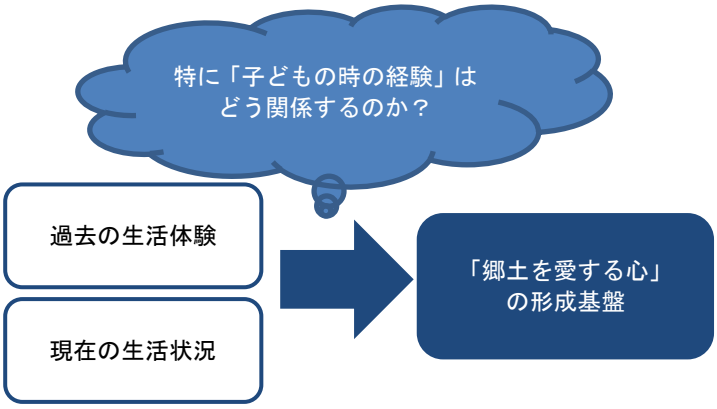


図１　本考察のねらい

今回調査した様々な資質・能力や経験と「郷土を愛する心」について相関分析[1]を行ったところ、図 2 のような相関関係が明らかになった。すなわち、**「郷土を愛する心」は、「（子どもの時の）家族との愛情・絆」「（現在の）自己肯定感」「（現在の）友人・相談資源」と相関があり、さらにこれら 4 つの項目はそれぞれに相関がある**。

次に、これら 4 つの項目を「高群／多群」「中群」「低群／少群」の 3 つに分けてクロス集計をしたのが図 3-1 から図 3-3 である。「家族との愛情・絆」「自己肯定感」「友人・相談資源」のそれぞれ「高群／多群」ほど、「郷土を愛する心」が高いことを確認できる。これらそれぞれの具体的な項目と「郷土を愛する心」との関係については 35 頁から 41 頁のクロス集計表に掲載されているが、例えば「家族と一緒にいることが楽しい」「家族の一員として役に立っている」「家族からの愛情を感じた」といった家族経験の多寡（37 頁）、「困ったときに相談にのってくれる人」「地元で一緒に遊ぶ人」といった人間関係の多さ（38 頁）、「今の自分が好き」「自分には自分らしさ」などの自己感覚（41 頁）が「郷土を愛する心」に影響を与えていることが示されている。

---

[1] 相関係数とは、2 つの変数の関連の強さを測る指標の 1 つである。相関係数は－1 から 1 の値をとり、相関係数が正の場合、一方の値が増えると他方の値も増え、正の相関があるという。負の値の場合、一方の値が減ると他方の値は減り、負の相関があるという（『社会調査事典』丸善出版株式会社、2014 年、p.238）。一般的には、相関関係の目安は次のとおりである。
0.0～±0.2：ほとんど相関がない　±0.2～±0.4：やや相関がある　±0.4～±0.7：相関がある
±0.7～±0.9：強い相関がある　±0.9～±1.0：きわめて強い相関がある

以上のように、**「郷土を愛する心」は、家族や友人といった身近で親密な人間関係と関連がある**ということが示唆される。親密なコミュニティが豊かにあり、そのコミュニティのなかで何らかの役割を担ったり、自分の居場所を感じるということが、「郷土を愛する心」につながるといえる。このように、**私的で親密な関係性が「郷土を愛する心」という公共的な広がりを持つ**ということは興味深い。

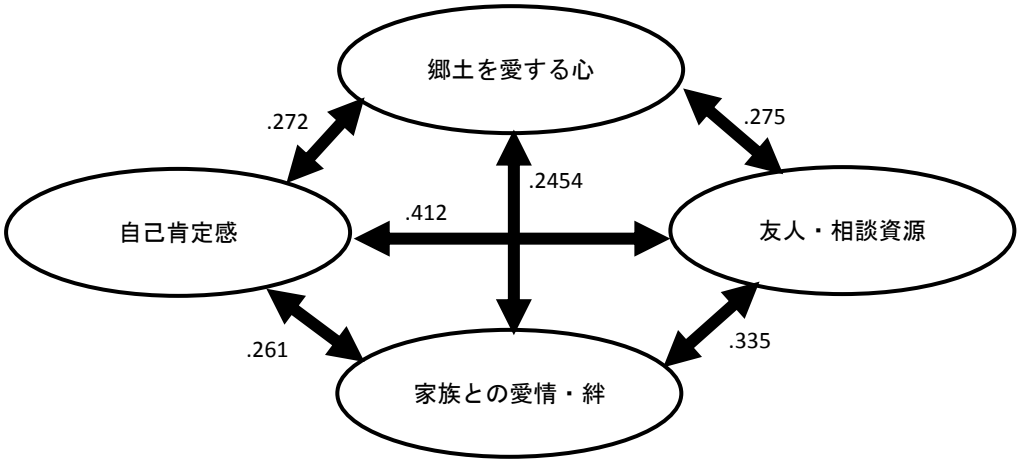


図 2　青森県における「郷土を愛する心」の形成基盤

図3-1　家族との愛情・絆と「郷土を愛する心」

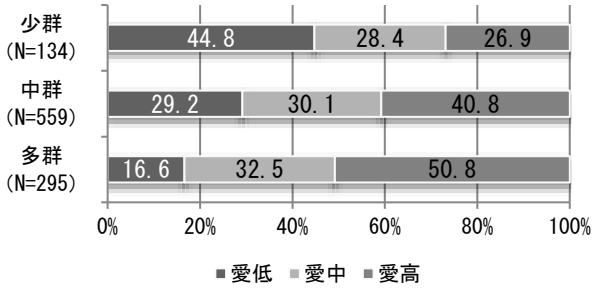


図3－2　自己肯定感と「郷土を愛する心」

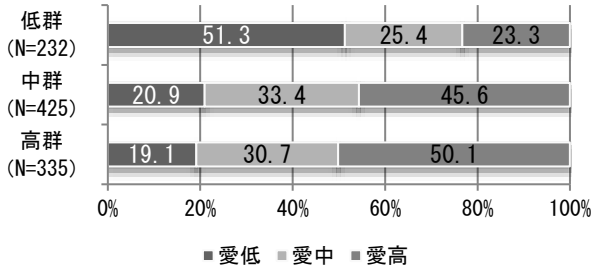
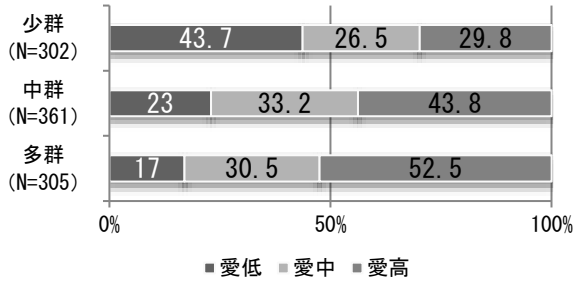


図3-3　友人・相談資源と「郷土を愛する心」



3　「子どもの時の経験」はいかに関係するのか

前節で示唆したのは、「郷土を愛する心」は、「家族との愛情・絆」「自己肯定感」「友人・相談資源」と相関関係があるということである。では、これら「家族との愛情・絆」「自己肯定感」「友人・相談資源」はどのような資質・能力や経験と関係しているだろうか。この 3 つの項目と子どもの頃の経験の相関分析をしたところ、表 1 のような結果となった。

①子どもの時の経験と「家族との愛情・絆」

子どもの時の経験のうち、「家族との愛情・絆」と相関がみられた経験は「基本的生活習慣」「お手伝い」「家族行事」「家庭の社会的・教育的条件」「近所の人との交流」である。この「家族との愛情・絆」は、問 1-2 の「家族で一緒にいることが楽しいと感じたこと」「家族の一員として役に立っていると感じたこと」「家

族からの愛情を感じたこと」という質問から構成されているわけだから、これらが家庭における「基本的生活習慣」「お手伝い」「家族行事」「家庭の社会的・教育的条件」と相関があることは容易に想像できることではある。

表１　子どもの時の経験と「「郷土を愛する心」の形成基盤」との相関分析の結果

子どもの時の経験	家族との愛情・絆	友人・相談資源	自己肯定感
基本的生活習慣	.329		
お手伝い	.293		
家族行事	.485	.232	
家庭の社会的・教育的条件	.424	.282	.252
友達と遊んだ経験		.248	.251
部活や習い事の経験		.250	.264
近所の人との交流	.248	.308	.291

r=0.2 以上のみ記載。下線は r=0.3 以上。いずれも相関係数は 1% 水準で有意。

ここで注目したいのは、「近所の人との交流」も「家族との愛情・絆」と相関があることである。例えば、「近所の人にほめられた」（問 3）や「近所の人に教えてもらった」（問 3）では、「何度もある」経験をした人の方が「家族との愛情・絆」の「多群」に位置している（図 4-1、図 4-2）。このことは、家族で「地域の祭り」「町内会のゴミ拾い」（問 1-1）などに参加するなかで、「家族の愛情・絆」と同時に「近所の人との交流」が生まれるからではないかと推測できる。

図4-1　「近所の人にほめられた」経験と家族の愛情

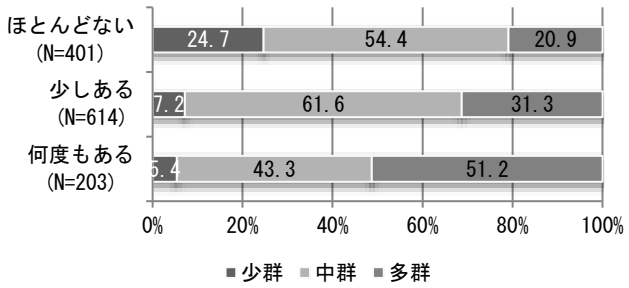
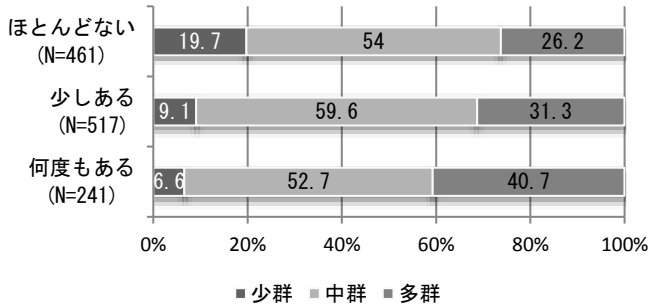


図4-2　「近所の人に遊んでもらった経験」と家族の愛情



②子どもの時の経験と「友人・相談資源」

同様に表 1 をみると、**子どもの時の経験のうち「友人・相談資源」と相関がある経験は、「家族行事」「家庭の社会的・教育的条件」「友達と遊んだ経験」「部活や習い事の経験」「近所の人との交流」である**。子どもの時に友達と遊んだり部活をすることだけではなく、「家族の誕生日を祝う」「家族で季節の行事をする」「家族で旅行に行く」「家族でスポーツをしたり自然の中で遊ぶ」といった、家族で一緒に活動をするということも、将来の「友人・相談資源」の豊かさにつながるということがわかる。

③子どもの時の経験と「自己肯定感」

表 1 から、**子どもの時の経験のうち「自己肯定感」と相関がある経験は、「家庭の社会的・教育的条件」「友達と遊んだ経験」「部活や習い事の経験」「近所の人との交流」である**。部活から地域行事まで、学校・家庭・地域に関わる多様な経験が「自己肯定感」につながるということが示唆される。

④どのような「子どもの時の経験」に注目すべきか

表 1 をみると、**「家庭の社会的・教育的条件」「近所の人との交流」の 2 つは、「家族との愛情・絆」「友人・相談資源」「自己肯定感」の全てと相関関係にある**。ここにおける「家庭の社会的・教育的条件」には「地域の祭りへの参加」「町内会のゴミ拾いへの参加」の地域活動が含まれている。「近所の人との交流」には「近所の人にほめられる」「近所の人に遊んでもらう」「近所の人に教えてもらう」といった経験が含まれている。これらは従来、子どもや家庭を対象とした社会教育行政が得意としてきた領域と大いに関係している。**大まかにいえば、子どもや家庭を対象とした社会教育行政の地道な取り組みが、「家族との愛情・絆」「友人・相談資源」「自己肯定感」につながり、そしてそれが「郷土を愛する心」を育むことへの近道であることを、本調査は示している**。

4　まとめにかえて―政策的示唆―

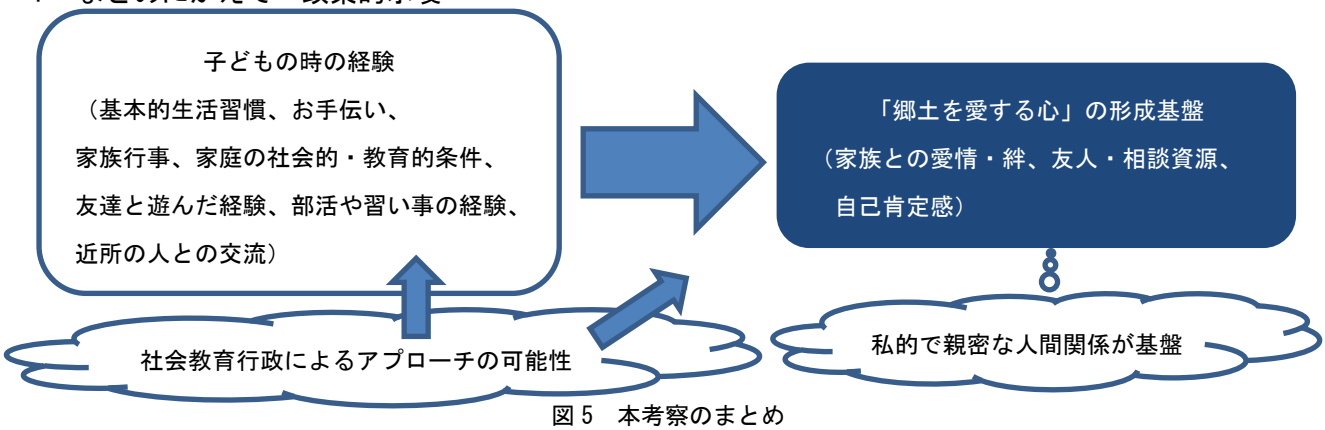


図 5　本考察のまとめ

限られた紙幅の関係上、大まかな分析ではあるが、本稿が明らかにしてきたことを図 5 のように整理することができる。以下では、本考察のまとめと政策的な示唆を指摘する。

まず「郷土を愛する心」は「家族との愛情・絆」「友人・相談資源」「自己肯定感」と相関関係にあることが示された。注目したいのは、「郷土を愛する心」という公共的な広がりをもつ価値観が、家族や友人等との関係という私的で親密な関係性に支えられているということである。**家族や友人という私的で親密な関係性やコミュニティにおいて役割や居場所があるということが「郷土を愛する心」の育成に大きな意味をもつ**のである。さらに、そうした**私的で親密な関係性は、子どもの時の経験と関連している**ことも今回の調査で示唆された。特に「郷土を愛する心」の形成基盤を構成する全ての項目と相関していたのが、子どもの時の「家庭の社会的・教育的条件」「近所の人との交流」であった。ここには、個人や家族としての地域活動への参加が含まれている。恐らく、**家族だけではなく地域との多様な交流があるがゆえに、私的で親密な関係性から公共的な価値観が生まれる**と推察できる。

以上から、社会教育行政への政策的示唆を 3 点指摘したい。第 1 に、**家庭教育支援の**意義を再確認できる。子どもが家庭で役割を担い、家庭で多様な経験を積むことの重要性をふまえた支援ということになろう。第 2 に、**学校・家庭・地域で多様な経験をつくる**ことである。家族内の交流だけではなく、子どもに多様な交流と関係性の経験をつくることが求められる。しかし、子どもや親をそうした多様な経験の場にいかに引き出すのかは課題といえるだろう。第 3 に、親密な関係につながる**「小さくて身近な仲間づくり」**が有効であるということである。これはむしろ大人への支援にあてはまる。以上のことは、従来指摘されてきた社会教育行政の課題とほぼ同一かもしれないが、むしろその重要性を改めて確認できたといえる。

「『郷土を愛する心』の形成基盤」に関わる項目

子どもの頃に感じた家族との愛情・絆（問 1-2） ・家族で一緒にいることが楽しいと感じたこと ・家族の一員として役に立っていると感じたこと ・家族からの愛情を感じたこと	**友人・相談資源（問 2）** ・困ったときに相談に乗ってくれる人 ・個人的な悩みを話せる人 ・同じ目標を目指して一緒に何かしている人 ・地元で一緒に遊ぶ人　・地元以外で一緒に遊ぶ人 ・何かについて、自分に頼ってくれる人
自己肯定感（問 11） ・今の自分が好きだ　・体力には自信がある　・人よりも仕事や勉強ができる方だ　・自分には自分らしさがある ・友だちは多い方だ	

区分を構成する項目に対する回答を 3～1 点（友人・相談資源は 5～1 点、自己肯定感は 4～1 点）に得点化し、各質問項目の合計得点を項目数で除して算出した平均値をもとに各区分の合成変数を作成。合成変数の平均値（M）及び標準偏差（SD）を算出し、それらを基準に「高群」（M＋SD÷2 以上）「中群」（M－SD÷2 以上 M＋SD÷2 未満）「低群」（M－SD÷2 以下）に分類。

子どもの時の経験に関わる項目

基本的生活習慣（問 1-1） ・家であいさつをすること ・自分のふとんの上げ下ろしやベッドを整頓したこと ・朝、人に起こされないで自分で起きたこと ・夜ふかしをして、遅くまで起きていたこと	**お手伝い（問 1-1）** ・買い物の手伝いをしたこと ・料理（準備や後片付けを含む）の手伝いをしたこと ・家の中の掃除やごみ出しの手伝いをしたこと ・洗濯（とりくむ・たたむを含む）の手伝いをしたこと
家族行事（問 1-1） ・家族の誕生日を祝ったこと ・家族で季節の行事（クリスマス、節分等）をしたこと ・家族で旅行に行ったこと	**家庭の教育的・社会的条件（問 1-1）** ・家族でスポーツをしたり自然の中で遊んだりしたこと ・家族で地域の祭りに参加したこと ・家族で町内会のゴミ拾いに参加したこと
友だちと遊んだ経験（問 1-3） ・公園や広場で友だちと外遊びをしたこと ・友達の家や自宅で友だちと室内遊びをしたこと	**部活や習い事の経験（問 1-3）** ・学校外のスポーツクラブや少年団で活動したこと ・学校外の文化系の習い事に通ったこと ・学校の運動系部活動で活動したこと ・学校の文化系部活動で活動したこと
近所の人との交流（問 3） ・近所の人にほめられたこと　・近所の人に注意されたこと　・近所の人に遊んでもらったこと ・近所の人に教えてもらったこと	

区分を構成する項目に対する回答を 3～1 点に得点化し、各質問項目の合計得点を項目数で除して算出した平均値をもとに各区分の合成変数を作成。合成変数の平均値（M）及び標準偏差（SD）を算出し、それらを基準に「多群」（M＋SD÷2 以上）「中群」（M－SD÷2 以上 M＋SD÷2 未満）「少群」（M－SD÷2 以下）に分類。

参考文献

国立青少年教育振興機構『子どもの頃の体験がはぐくむ力とその成果に関する調査研究』2017 年。